「お手紙」台本（一の場めん）　二年（　）

がまくんは、げんかんの前に　すわっていました。

かえるくんがやって来て、言いました。

「どうしたんだい、がまがえるくん。きみ、かなしそうだね。」

「うん、そうなんだ。」

がまくんが言いました。

「今、一日のうちの　かなしい時なんだ。つまり、お手紙をまつ時間なんだ。そうなると、いつもぼく、とても　ふしあわせな気もちに　なるんだよ。」

「そりゃ、どういうわけ。」

かえるくんがたずねました。

「だって、ぼく、お手紙もらったこと　ないんだもの。」

がまくんが言いました。

「いちどもかい。」

かえるくんがたずねました。

「ああ。いちども。」

がまくんが言いました。

「だれも、ぼくに　お手紙なんかくれたことがないんだ。毎日、ぼくのゆうびんうけは、空っぽさ。お手紙を　まっているときが　かなしいのは、そのためなのさ。」

ふたりとも、かなしい気分で、げんかんの前に　こしを下ろして　いました。

すると、かえるくんが言いました。

「ぼく、もう　家へ帰らなくちゃ、がまくん。しなくちゃいけない　ことが、あるんだ。」

「お手紙」台本（二の場めん）　二年（　　）

かえるくんは、大いそぎで　家へ帰りました。えんぴつと紙を見つけました。紙に何か書きました。紙をふうとうに入れました。ふうとうに　こう書きました。

「がまがえるくんへ」

かえるくんは、家からとび出しました。知り合いのかたつむりくんに会いました。

「かたつむりくん。」

かえるくんが言いました。

「おねがいだけど、このお手紙を　がまくんの家へ　もっていって、ゆうびんうけに入れてきてくれないかい。」

「まかせてくれよ。」

かたつむりくんが言いました。

「すぐやるぜ。」

それから、かえるくんは、がまくんの家へもどりました。

「お手紙」台本（三の場めん前半）　二年（　　）

がまくんは、ベッドで　お昼ねをしていました。

「がまくん。」

かえるくんが言いました。

「きみ、おきてさ、お手紙が来るのを、もうちょっと　まってみたらいいと思うな。」

「いやだよ。」

がまくんが言いました。

「ぼく、もう　まっているの、あきあきしたよ。」

かえるくんは、まどからゆうびんうけを見ました。

かたつむりくんは、まだやってきません。

「がまくん。」

かえるくんが言いました。

「ひょっとして、だれかが、きみにお手紙を　くれるかもしれないだろう。」

「そんなこと、あるものかい。」

がまくんが言いました。

「ぼくに　お手紙をくれる人なんて、いるとは思えないよ。」

かえるくんは、まどから　のぞきました。

かたつむりくんは、まだ　やって来ません。

「でもね、がまくん。」

かえるくんが言いました。

「きょうは、だれかが、きみに　お手紙　くれるかもしれないよ。」

「ばからしいこと、言うなよ。」

がまくんが言いました。

「今まで、だれも、お手紙くれなかったんだぜ。きょうだって同じだろうよ。」

かえるくんは、まどから　のぞきました。

かたつむりくんは、まだ　やって来ません。

「お手紙」台本（三の場めん後半）　二年（　　）

「かえるくん、どうして、きみ、ずっと　まどの外を見ているの。」

がまくんがたずねました。

「だって、今、ぼく、お手紙をまっているんだもの。」

かえるくんが言いました。

「でも、来やしないよ。」

がまくんが言いました。

「きっと来るよ。」

かえるくんが言いました。

「だって、ぼくが、きみにお手紙出したんだもの。」

「きみが。」

がまくんが言いました。

「お手紙に、なんて書いたの。」

かえるくんが言いました。

「ぼくは、こう書いたんだ。

『親愛なる　がまがえるくん。ぼくは、きみが　ぼくの親友であることを、うれしく思っています。きみの親友、かえる。』

「ああ。」

がまくんが言いました。

「とても　いいお手紙だ。」

それから、ふたりは、げんかんに出て、お手紙が来るのを　まっていました。

ふたりとも、とても　しあわせな気もちで、そこにすわっていました。

長いこと　まっていました。

「お手紙」台本(四の場めん)　　二年(　　)

四日たって、かたつむりくんが、がまくんの家につきました。

そして、かえるくんからのお手紙を、がまくんに　わたしました。

お手紙をもらって、がまくんは、とても　よろこびました。

「お手紙」台本（一の場めん）　二年（　　）

がまくんは、げんかんの前に　すわっていました。

かえるくんがやって来て、言いました。

か　「どうしたんだい、がまがえるくん。きみ、かなしそうだね。」

がま　（心）くらいかんじで
「うん、そうなんだ。」

がまくんが言いました。

がま　（心）しょんぼりしたこえで
「今、一日のうちの　かなしい時なんだ。つまり、お手紙をまつ時間なんだ。そうなると、いつもぼく、とても　つよく　ふしあわせな気もちに　なるんだよ。」

か　「そりゃ、どういうわけ。」

かえるくんがたずねました。

がま　（心）なきそうなこえで
「だって、ぼく、お手紙もらったこと　ないんだもの。」

がまくんが言いました。

か　「いちどもかい。」

かえるくんがたずねました。

がま　（心）ひくいこえ
「ああ。いちども。」

がまくんが言いました。

がま　「だれも、ぼくに　お手紙なんかくれたことがないんだ。（心）ちょっとおこったように　毎日、ぼくのゆうびんうけは、空っぽさ。お手紙を　まっているときが　かなしいのは、もんくをいうように　そのためなのさ。」

ふたりとも、かなしい気分で、げんかんの前に　こしを下ろして　いました。

すると、かえるくんが言いました。

か　「ぼく、もう　家へ帰らなくちゃ、がまくん。しなくちゃいけない　ことが、あるんだ。」